

して舊唐書が其の名を逸せる磨延啜の死没の時を誤記せるものにして、據る可らざること次章に述ぶるが如し。

回鶻が新たに北方の大勢力として現はるゝに至りしは實に裴羅の時よりの事にして、當時突厥の勢の漸く衰へたるに乘じ、諸部と共に先づ之を倒し、次で諸部を壓服して大業を完成するに至れり、新唐書回鶻傳に據れば

骨力裴羅立、會突厥亂、天寶初裴羅與葛邏祿、自稱左右葉護、助拔悉蜜、擊走烏蘇可汗

と記せり、突厥にては開元二十年默棘連可汗死して其の子伊然可汗立ち、在位八年の後弟登利可汗繼ぎしが、部下の爲に殺され、默棘連可汗の子代り立ちしも、亦骨咄葉護の爲に殺されたり、骨咄葉護は前可汗の弟を立てしも、更に之を殺して遂に自ら位に上れり、唐書回鶻傳に「會突厥亂」と記せるものは、即ち此の有様を曰へるものに外ならず、此の際回鶻は突厥の混亂に乘じ、葛邏祿 (Karluk)・拔悉蜜 (Basml) の二部と共に起ちて突厥を攻め、可汗骨咄葉護を殺し、拔悉蜜の部酋阿史那施を立て、可汗とし、其の下に葛邏祿と共に左右の葉護となるに至りしものにして、新唐書突厥傳に

天寶初其大部回紇・葛邏祿・拔悉蜜並起、攻葉護殺之、尊拔悉蜜之長、爲頡^(五二)陁伊施可汗、於是回紇葛邏祿自爲左右葉護、又遣使者來告

と記せり、護輸の漠北に走りし後、此の時即ち天寶の初めに至る迄の間に於て、回鶻部が如何なる情態に在りしかは、殆んど知るを得ざれども、かく葛邏祿・拔悉蜜の二部と共に、突厥の衰運に乗ずる魁を爲し、ことより考ふれば、此の間突厥の配下に屬しながら、此等の兩大部と比肩すべき勢力を作り得たりしものなること疑無く、從て獨解支の南徒後も、漠北に殘留したる回鶻の部衆は、尙決して少々に非りしことを推知するに難からず。